

ライブツィヒ現代美術館
会期：2011年12月10日-2012年5月18日
オープニング：2011年12月9日19:00
www.gfzk.de

—
アーキテクチュアル・アソシエーション
(ロンドン)

会期：2012年4月28日-5月26日
オープニング：2012年4月27日18:30
www.aaschool.ac.uk

—
グラハム美術高等研究財団 (シカゴ)

会期：2012年7月14日-9月23日
オープニング：2012年7月14日18:00
www.grahamfoundation.org

—
関連書籍『ザック・カイズとの共同制作』
2012年6月, スタンバーグ・プレス刊行予定
判型：11x17.8cm, 160頁, ハードカバー版
ISBN 978-1-934105-92-4
www.sternbergpress.com

Galerie für Zeitgenössische
Kunst Leipzig Museum
for Contemporary Art Leipzig
10 December 2011 to 18 March 2012
Opening: 9 December 2011, 7:00 p.m.
www.gfzk.de

—
Architectural Association, London
28 April to 26 May 2012
Opening: 27 April 2012, 6:30 p.m.
www.aaschool.ac.uk

—
Graham Foundation for
Advanced Studies in the Fine Arts, Chicago
14 June to 25 September 2012
Opening: 14 June, 6:00 p.m.
www.grahamfoundation.org

—
Zak Kyes Working With... will be published
by Sternberg Press in June 2012.
11 x 17.8cm, ca. 160 pages, hardcover
ISBN 978-1-934105-92-4
www.sternbergpress.com

展覧会
「ザック・カイズ
との共同制作」

ジャン・アルタイ
シャルル・アルセーヌ・アンリ
シュモン・バザール
リチャード・バーケット
アンドリュー・ブラウベルト
ウェイン・ダリー
イエスコ・フィザー
ジョセフ・グリグリー
ニコラウス・ヒルシュ
マリア・リンド
マルクス・マイセン
ミヒエル・ミュラー
ラディム・ペスコ
バーバラ・スタイナー

Zak Kyes
Working With...

Can Altay
Charles Arsène-Henry
Shumon Basar
Richard Birkett
Andrew Blauvelt
Edward Bottoms
Wayne Daly
Jesko Fezer
Joseph Grigely
Nikolaus Hirsch
Maria Lind
Markus Miessen
Michel Müller
Radim Peško
Barbara Steiner

Zak Kyes Working With...

The book ‘Zak Kyes Working With…’ provides a parallel

discursive context evolving around Kyes’ practise and the collaborative projects. Andrew Blauvelt explores the generative nature of the exhibition, respectively the “Exhibitionary Apparatus” as he calls it, a support system that carries and surrounds any exhibition.

He takes the exhibition Parallel of Life and Art at the Institute of Contemporary Arts (ICA) in London, 1953, as a point of departure and draws a line to Forms of Inquiry: The Architecture of Critical Graphic Design, curated by Kyes for the Architectural Association in London, 2008, focusing on the exhibitionary apparatus as an incubator of new ideas, a generator of new work that has the power of transcending disciplinary boundaries and conventions. Edward Bottoms chronicles experiments in publishing at the Architectural Association in London from 1847 up to the present and contextualises them within critical discourses of the respective time period. Richard Birkett’s text speaks about the intricate relationship between cultural and corporate spheres taking the exhibition, “_____ , Louise Lawler, Adrian Piper & Cindy Sherman Have Agreed to Participate in an Exhibition Organized by Janelle Reiring at Artists Space, September 23 through October 28, 1978,” at Artist Space in New York and Christopher D’Arcangelo’s position in that show as a point of reference. Birkett indicates the proliferation of graphic identity, with particular reference to contemporary art institutions, and – most important – to the fact that contemporary art institutions have become increasingly preoccupied with their own image (policy). Markus Miessen addresses various kinds of relationship and their impact on collaborations and sets them in relation to economic practices, looking at resulting conflicts as a productive factor. Conversation that has neither an ostensible target nor purpose is introduced as a method of producing the specifics of collaboration. Maria Lind examines collaboration and cooperation as a means of challenging identity and authorship while Barbara Steiner relates art and graphic design to questions of economy and takes a closer look at forms of critical practise and the difficulties of developing a critical stance toward economic structures on which one depends.

Zak Kyes is the recipient of the 2010 INFORM Award, the annual accolade presented to graphic designers who develop a practice within the context of applied and contemporary art. The award consists of a prize as well as a one-person exhibition at the Museum of Contemporary Art Leipzig. Previous recipients include Laurent Benner, 2007; Julia Born, 2008; and Rebecca Stephany, 2009.

Zak Kyes Working With…

This year the Museum of Contemporary Art Leipzig presents the first solo exhibition in Germany by the Swiss-American graphic designer Zak Kyes. In collaboration with the curator, Barbara Steiner, the exhibition brings together a range of works by Kyes, as well as works by a host of collaborators that includes architects, artists, writers, curators, editors, and graphic designers, presenting contemporary graphic design as a practice that mediates, and is mediated by, its allied disciplines.

Kyes, who lives and works in London, is known for his critical approach to graphic design, which encompasses publishing, editing, and site-specific projects for and in collaboration with cultural institutions. In 2005, Kyes founded the design studio Zak Group, and, in 2006, he became Art Director of the Architectural Association (AA), London. Under the auspices of the AA, he organized the seminal touring exhibition “Forms of Inquiry: The Architecture of Critical Graphic Design,” and later cofounded Bedford Press, an imprint that seeks to develop new models for contemporary publishing. By broadening the highly specialized role of the designer, Kyes challenges and further develops today’s graphic design practice.

While this work constitutes the exhibition’s point of departure, its focus is on the conceptual, visual, and economic intersections that link Kyes with his collaborators, revealing and further unfolding the designer’s multivalent practice. These intersections vary in form from idealistic to pragmatic, urgent and time-sensitive to abiding and long-lasting. Rather than presenting a chronological overview of Kyes’s work, the exhibition highlights the designer’s relations with partners, clients, and institutions, and the creative potential of these collaborations to evolve traditional understandings of graphic design, art, and architecture.

Each invited contributor is assigned a role that addresses the different formats of an exhibition. Archtect Jesko Fezer was invited to propose the exhibition architecture, while typographer Radim Peško will design a typeface for the show’s object labels and wall texts. Artist Jospheh Grigely will create the exhibition poster, and writers Shumon Basar and Charles Arsène-Henry will conceive the audio guide. Artist Can Altay will conduct a publishing work shop, and archivist and librarian Edward Bottoms will offer a historical lecture on architectural publishing. Architects Nikolaus Hirsch and Michel Müller will devise an archive structure, and graphic designer Wayne Daly will design an expanded exhibition catalogue published by Sternberg Press (2012).

書籍版『ザック・カイズとの共同制作』では、カイズの実践と彼の共同制作のプロジェクトを題材に展開された、様々な論者による議論のコンテキストが紹介されている。ウォーカー・アートセンターのデザインディレクターを務めるアンドリュース・ブラウベルトは、展覧会の生成的な特質について考察を行うなかで、あらゆる展覧会を取り巻く支援の制度のことを“展示装置”と名付けて論じている。

彼は1953年にロンドンのインスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アーツ（ICA）で開催された展覧会「パラレル・オブ・ライフ・アンド・アート」を議論の出発点として、そこから2008年にロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーションにおいてカイズがキュレーションをした「フォームズ・オブ・インクワイアリ：批評的グラフィックデザインのアーキテクチャー」展までの線を描いたうえで、新しい発想を育成するインキュベーターであり、専門分野の境界や伝統的慣習を越え出る力を持った新しい作品のジェネレーターとしての“展示装置”に焦点をあてる。エドワード・ボトムスは、1847年から現在までのあいだにアーキテクチュラル・アソシエーションで発行された様々な実験的出版物を年代順に示し、個別の時代状況が反映された批評的言説のなかに、それらの出版物を位置づけて論じた。リチャード・バークットのテキストは、文化の領域と企業の領域とのあいだの複雑な関係性について論じており、彼はニューヨークのアーティスト・スペースにおける展覧会「_____ , ルイーズ・ローラー, エイドリアン・パイパー & シンディ・シャーマンは、1978年の9月23日から10月28日までアーティスト・スペースで開催されるジャネル・レイリング企画による展覧会へ参加することに同意した」を例にとりながら、その展覧会でクリストファー・ダルカンジェロが果たした役割について参照している。さらにバークットは企業のためのグラフィック・アイデンティティの急増について指摘したうえで、とりわけ現代美術の文化施設のためのアイデンティティに焦点を当て、企業と同様に文化的施設も、自身の対外的なイメージ（戦略）に次第に気を取られるようになっていった、という非常に重要な事実を明らかにした。マルクス・マイセンは、多種多様な関係性とそのコラボレーションへの影響について、それを経済的実務との関係のなかに位置づけて論じ、さらにその結果として生じる不和の生産的な要因としての側面に目を向ける。また、表向きの狙いも目的も持たない会話こそが、コラボレーションの固有性を生み出すための方法であると彼は述べている。マリア・リンドは共同制作や協力を、アイデンティティや作者性を試練にさらすための手段であると説き、また、バーバラ・スタイナーは美術とグラフィックデザインを経済に対する問いかけと関連づけ、人々が拠って立つところの経済的な社会構造に対して批判的なスタンスをとることの難しさや、そのための批評的実践の形式について詳しく論じている。

ザック・カイズは商業美術・現代美術の分野で活躍するグラフィックデザイナーのなかから毎年1名に贈呈されるインフォーム賞の2010年度の授賞者に選ばれた。同賞では、授賞者に対して賞金とともに、ライプツィヒ現代美術館における個展を開催する機会が与えられており、本展覧会は、カイズの授賞を機に企画されたものである。

本記事は同展を誌上で再構成したものである。各参加者の作品を見開き単位で掲載し、左ページに今回のための新作を、右ページにこれまでのザックとの共同作品を紹介している。

ザック・カイズとの共同制作

スイス系アメリカ人グラフィックデザイナーのザック・カイズにとって初となる個展が、ドイツのライプツィヒ現代美術館において開催された。同館のキュレーターを務めるバーバラ・スタイナーの協力のもと、展覧会場にはカイズの手がけてきた様々な仕事とともに、これまで彼と数多くの共同制作に関わってきた建築家、美術家、ライター、キュレーター、編集者、グラフィックデザイナーたちによる制作物が一堂に集められた。その両者を並べて見せることでカイズは、現代においてグラフィックデザインという職能領域が、関連する諸領域との仲介役を果たす実践であるのと同時に、諸領域との相互作用が介在することによって成り立っている実践でもある、ということを示したのである。

ロンドンを拠点に活動するカイズは、グラフィックデザインに対するその批評的な取り組みによって知られている。様々な文化施設からの依頼やコラボレーションの求めに応じ、彼は出版物の制作、編集活動、サイト・スペシフィックな企画など、多岐に及ぶアプローチを採用してきた。2005年にカイズはデザイン事務所ザック・グループを設立し、その翌年にはロンドンの建築学校アーキテクチュラル・アソシエーションのアートディレクターに就任した。同校のもてで、彼はヨーロッパ各地を巡回し、多くの議論を呼んだ展覧会「フォームズ・オブ・インクワイアリ：批評的グラフィックデザインのアーキテクチャー」展を企画し、また、出版社ベッドフォード・プレスを共同設立することで現代の出版活動の新たなモデルを探求してきた。高度に専門分化されたデザイナーの役割を常に押し拡げていく実践によって、カイズはグラフィックデザインという実践の今日的な再定義に挑み、その一層の発展に取り組んできた。

こうした彼の制作活動自体は、展覧会の出発点となる構成要素であるものの、展示においては、カイズと彼の共同制作者たちとを結びつけている概念的、視覚的、経済的な意味での交差点に焦点があてられ、デザイナーの実践が内包している多様な価値の顕在化と、そのさらなる展開に主眼が置かれている。このような交差のあり方は、理想的なものから実際的なものまで、あるいは緊急かつ時間的制約のあるものから変わることなく長続きするものまで様々であろう。そうした交差の様態を示すために、展覧会ではカイズの手がけた制作物を単に年代順に並べることはあえて行わず、むしろデザイナーとパートナー／クライアント／文化的機関との関係性や、彼らのコラボレーションの創造的なポテンシャルに光を当てることで、グラフィックデザインと美術と建築の関係に対する旧来的な理解を進展させようとして試みているのだ。

本展への参加に招待された共同制作者たちには、展覧会という形式に取り組むための何かしらの役割が、各々それぞれに当てがわれた。例えば、建築家のイエスコ・フィザーには展示空間の構造物についての提案をするように要請し、タイポグラフィのラディム・ペスコの場合であれば、展示物のキャプションラベルや壁面の文章に用いるタイプフェイスのデザインを依頼した。アーティストのジョセフ・グリグリーには展覧会のポスターの作成を、ライターのリシュモン・バザールとシャルル・アルセーヌ・アンリには展示解説の音声ガイドをつくってもらっている。会期中には、美術家のジャン・アルタイが出版にまつわるワークショップを実施し、アーキビストで図書館員のエドワード・ボトムスが建築関係の出版物の歴史に関するレクチャーを行なった。また、建築家のニコラウス・ヒルシュとミヒエル・ミュラーにはアーカイブの仕組みを考案してもらい、グラフィックデザイナーのウェイン・ダリーは展覧会の延長でスターンバーグ・プレスから2012年に出版予定のカタログのデザインを担当した。

イエスコ・フィザー
展示空間の設計, 2011年

「ザック・カイズとの共同制作」の展示デザインのために、建築家のイエスコ・フィザーはインスタレーションの空間を形づくるための10箇条の規則による定義を提案した。厳密でありながら遊び心のあるシステムによって、彼は展示会に対して空間的なパラメーターを導入した。その機能性と空間性、キュレーション上の構想は、個人的関心や非実用性にも関わるものである。

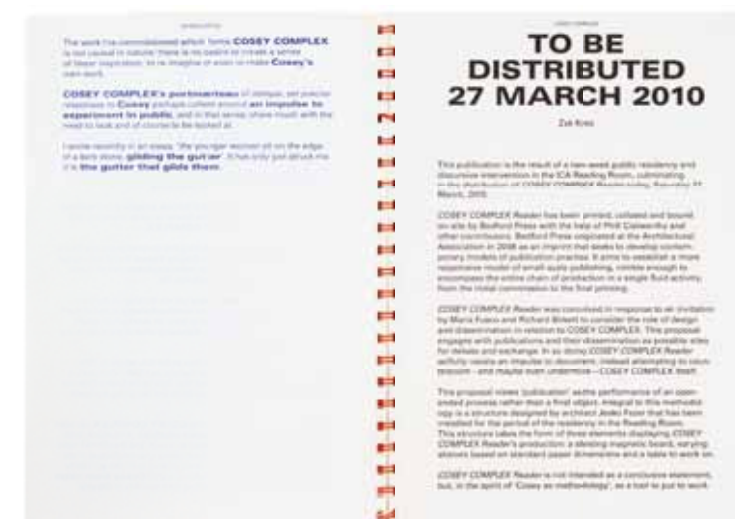
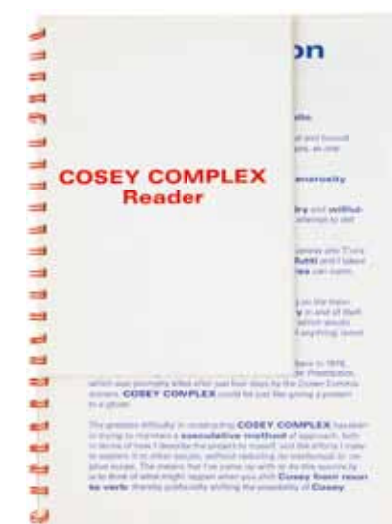
1. 棚, テーブル, 椅子を置かない
2. 残念ながら, 本を置くこともしない
3. 開かれた動きを推奨しない
4. 実用的で業務的なディスプレイ・デザインはしない
5. 表面的な飾りはせず, 空間に対しては引くか足すかの変更のみ
6. 展示会の制作物の無駄をはぶく
7. ザックのオフィスの収納付きベッドを含める
8. イエスコの自宅キッチンものを会期終了まで再利用する
9. 展示は壁面かそれ以外のどこかでやる
10. このルールは, おおむね守られなければならない



Jesko Fezer
Exhibition Architecture, 2011-

For the exhibition design of 'Zak Kyes Working With...' architect Jesko Fezer proposed ten rules to define and help shape the installation. The strict, yet playful, system forms the spatial parameters of the exhibition, where functionality and spatial and curatorial frameworks must engage with subjective concerns and nonpragmatism.

1. No shelves, tables or chairs
2. Unfortunately, no books either
3. No open movement suggested
4. No pragmatic service-oriented display design
5. No cosmetics: only subtractive or additive changes to the space
6. Eliminate the waste of exhibition production
7. Include a bed with storage for Zak's office
8. Re-use elements for Jesko's personal kitchen at the end of the exhibition
9. The exhibition will be on the walls or elsewhere
10. The rules should be followed more or less



コージー・コンプレックス・リーダー
出版物, 2010年

『コージー・コンプレックス・リーダー』(ICA 出版部, 2010年)はロンドンの現代芸術研究所(ICA)での3週間の滞在制作に参加したカイズが、建築家のイエスコ・フィザーを招いてインスタレーションの共同制作を行なったときの成果物である。この滞在制作は、美術ライターのマリア・フスコとキュレーターのリチャード・パーケットから2010年3月27日にICAにて開催されたイベント「コージー・コンプレックス」の関連出版物とデザインを考える役割を依頼されたことへの回答として着想された。イベントへの14人の参加者は、アーティストのコージー・ファニ・トゥッティの作品を用い、その視点に介在する方法論に取り組んだ。その方法論にまつわる3つの対話を軸に構成したリーダーという冊子は、展示会の制作物への批評的解釈として、執筆、編集、展示、印刷などを含む出版の全工程を提示するためにICAの読書室に、フィザーのデザインによって収納であり家具であり展示装置でもあるようなハイブリッドなインスタレーション空間を設置し、ベッドフォード・プレスによって現地で出版された。

COSEY COMPLEX READER
Publication, 2010

COSEY COMPLEX READER (ICA Publications, 2010) resulted from a three week public residency. Kyes participated in the Institute of Contemporary Arts (ICA), London, where he invited architect Jesko Fezer to collaborate on an installation. The residency was conceived in response to writer Maria Fusco and curator Richard Birkett's invitation to consider the role of design and dissemination in relation to the one-day event COSEY COMPLEX at the ICA, on 27 March 2010. The event included fourteen participants who used the work of artist Cosy Fanni Tutti as a lens through which to address methodology. The reader, organized around three conversations on methodology, was published on-site by Bedford Press, in a hybrid installation designed by Fezer; part storage, furniture and display, it presented the entire process of publishing, encompassing writing, editing, displaying and printing, as a critical aspect of exhibition production.

ニコラウス・ヒルシュ, ミヒェル・ミュラー
展覧会のアーカイブ, 2011年

2006年の半ば, 建築家ニコラウス・ヒルシュとミヒェル・ミュラーは, デリーに拠点を置き, 様々なメディアを通じて都市のコンテクストに介入してきた10人のライター, 実践者たちの集合組織サイバーモハラ*との対話を通じて, サイバーモハラ・ハブを立ち上げた。サイバーモハラ・ハブはデリーの新しい地域における, 学校とコミュニティセンターとギャラリーの中間的なものを担うような文化的実験室のための進行中のプロジェクトである。その一方で, このプロジェクトは他の都市のコンテクストにおいても展開されてきた。理論上ハブとはあらゆる場所に築くことができるものであり, この5年間に, ストックホルム, ボルツァーノ, ウィーン, コペンハーゲンなどさまざまな場所で実施されてきた。ヒルシュとミュラーは「ザック・カイズとの共同制作」展のために, 展覧会の制作物に関するアーカイブを, 巨大なサイバーモハラ・ハブの構造体の一部によって表現することを提案した。

*サイバーモハラという名称は, ヒンディー語やウルドゥー語で近隣地域を意味する単語モハラを元としている。

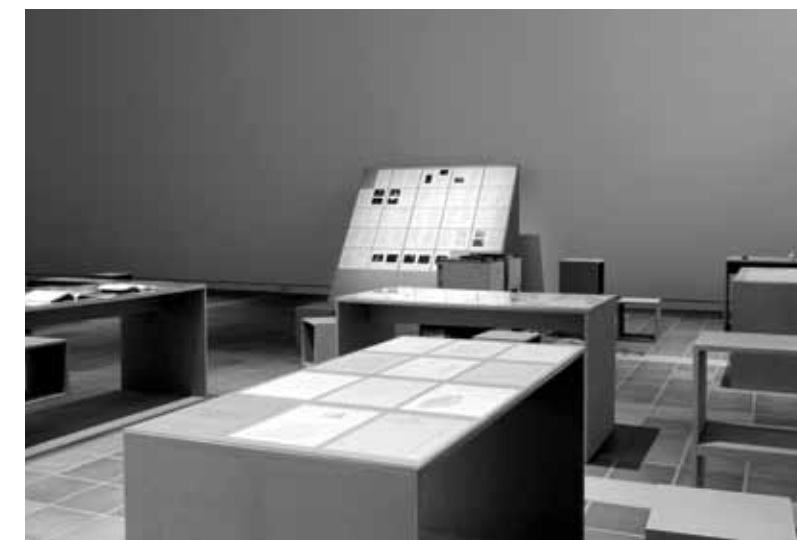
Nikolaus Hirsch and Michel Müller
Exhibition Archive, 2011

In mid-2006, Cybermohalla Hub was developed by the architects Nikolaus Hirsch and Michel Müller in close dialogue with Cybermohalla,* a Delhi-based collective of ten writers and practitioners who engage with their urban contexts through various media. Cybermohalla Hub is a growing project for a cultural laboratory in a new settlement in Delhi, a hybrid between school, community centre and gallery. Meanwhile, the project has been initiated in other urban contexts. Theoretically, the hub could be built anywhere, just as it has been in the last five years of its life: During this time it has been installed in Stockholm, Bolzano, Vienna and Copenhagen. For 'Zak Kyes Working With...' Hirsch and Müller propose that one segment of the larger Cybermohalla Hub structure represent an archive in relation to exhibition production.

*The name Cybermohalla refers to Mohalla that means in Hindi and Urdu neighbourhood.



Delhi, May 2011



Cybermohalla
Letter of Invitation, 2010

The version of the Cybermohalla Hub at the Louisiana Museum of Modern Art, Copenhagen, included a workshop installation developed by Zak Kyes together with Nikolaus Hirsch and Michel Müller. It explored the relevance of writing and publishing within the Cybermohalla project. At the beginning of the exhibition, the first pages of the book were designed, printed and sent to an international group of contributors. This document contained a letter of invitation and a selection of texts and conversations to which the contributors could respond freely. The responses, as they were received, fed back into the exhibition during a workshop and series of public discussions in which the structure, design and rhythm of the texts was intensely discussed. This is part of a book in progress to be published in 2012.

Dear friends,

We are a group that has been working together for ten years now. We write, make images, and imagine structures in which many may connect with each other through their thinking. Life, its multiple expressions and forms—the ever-expanding city and the world that knocks and winks at, that withdraws from and envelops us—are the realm of our exploration and questioning. For many years now, we have pursued our questions and sought to bring our ways of thinking into a conversation and collision with the world.

The materials we are sending to you are both a preview of our coming work and a preview to a book we are currently producing. Please find enclosed details about the book at the beginning of the preview materials.

We would like to invite you to argue and play with, critique, ask questions of, speculate, think with all of, or fragments from, this material. Your responses could be texts of a thousand words, images, speculations, drawings, or any form that the material evokes in you.

We would request you to think of responses that we can share further with the world, but can also take with us on our journeys. Your responses will be part of the book.

We would be delighted if you could send your responses by June 15, 2011. We know this is short notice, but the date of publication is near, and we would like to have time to have your responses translated into Hindi so we can read them. We expect the book to be ready by September 2011.

We hope you will read this and respond to us.

With warmth and regards,
Cybermohalla Ensemble

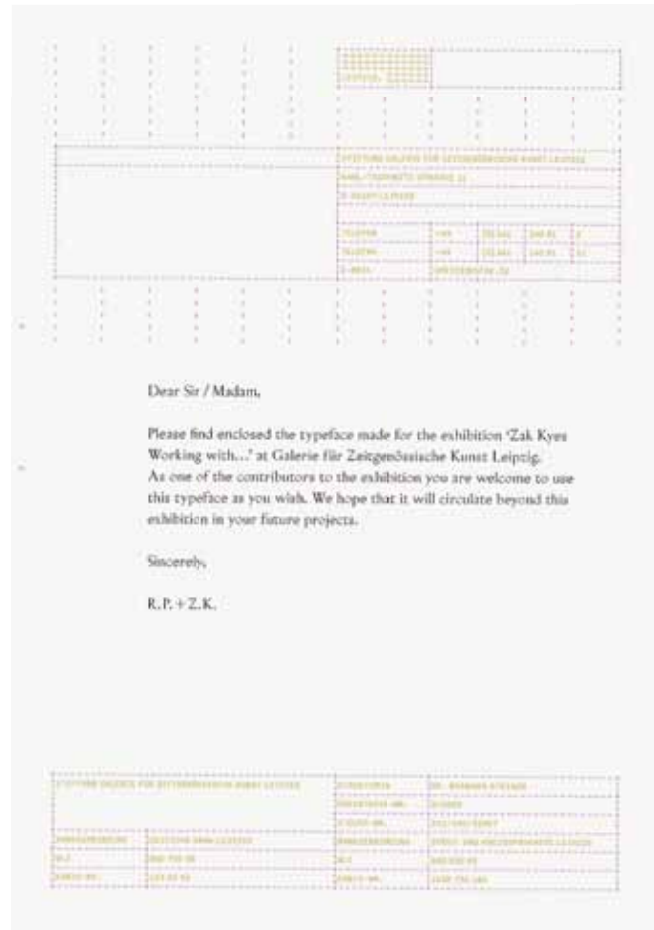




Radim Peško
Object Labels & Interpretation Texts, 2011

The typeface 'Dear Sir/Madam,' has been created by designer Radim Peško specifically for the exhibition's object labels and wall texts.

The typeface is inspired by classical alphabets that were used as guides for signwriters. In the time leading up to the exhibition, the typeface was sent to each contributor for their future use. As such the use of the typeface is free but limited to the group of collaborators in the exhibition. Through its availability to the exhibition's participants, the typeface will continue to circulate within their various upcoming projects, thus extending the space and the duration of the exhibition.



拝啓、
ライプツィヒ現代美術館における展覧会『ザック・カイズとの共同制作』のために制作した活字書体を同封致しました。展覧会の参加者の1人として、どうぞこの書体をご自由にお使いください。展覧会の枠組みを越え、皆様の今後のプロジェクトにおいて書体が広まっていくことを願っております。
敬具
R.P.+Z.K.

ラディム・ペスコ
展示品ラベル & 作品解説文, 2011年

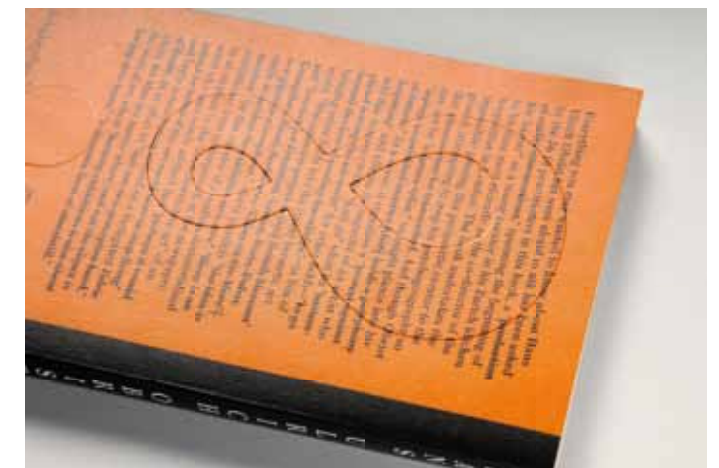
書体 'Dear Sir / Madam' は、展覧会の作品キャプションや壁面テキストに使用するための専用書体としてデザイナーのラディム・ペスコによって制作された。その書体は、看板制作者のための手引書に使用されていた伝統的なアルファベットから着想を得たものである。展覧会会期前に、その書体は各協力者たちが今後使えるように配布された。こうした書体の使用については自由だが、その範囲は展覧会のコラボレーターたちに限定されている。展覧会の参加者に使用可能にするを通じて、その書体は彼らの今後の様々なプロジェクトにおいて流通し続け、ひいては展覧会の会場・会期を越えて拡張していくであろう。

無限疑問符
約物 (8), 2010年

無限疑問符 (インターフィニティ・マーク) は、垂直に傾けた無限大記号 (∞) と疑問符 (?) を重ねあわせた形をした疑問をあらわす約物である。無限疑問符は、無限の応答を求めるような疑問符として理解されるべき問いかけを指し示している。この無限疑問符は、計り知れない数の論点を意味する修辭的な質問を指し示す符号として16世紀後半につくり出されたが、短命に終わった「パーコンティション・ポイント」とも異なるものだ。この符号はラディム・ペスコとカイズによって考案され、キュレーターのハンス・ウルリッヒ・オブリストのインタビュー集『キュレーションについてあなたが知りたかったすべてのこと』(スタンバーグ・プレス, 2010年)で初めて使用された。この無限疑問符は、2009年にペスコによって開設された小規模なデジタル書体制作販売所 RP ファウンドリイから今後発売される書体に含まれる予定である。

Interfinitary Mark
Punctuation Mark (8), 2010

The interfinity mark is an interrogative punctuation mark formed by superimposing a vertical infinity mark (∞) with a question mark (?). The interfinity mark indicates a question that should be understood as an interrogation inviting innumerable responses. The interfinity mark differs from the percontation point, a short-lived punctuation invented in the late sixteenth century to indicate rhetorical questions, in that it denotes an immeasurable number of questions. Conceived Radim Peško and Kye, it was first used in Everything You Always Wanted to Know About Curating (Sternberg Press, 2010), a book of interviews with Hans Ulrich Obrist. The interfinity mark will be included in all future typefaces released by RP Foundry, a small-scale, digital type foundry established in 2009 by Peško.





ジョセフ・グリグリー
展覧会ポスター, 2011年

本展覧会のために美術家ジョセフ・グリグリーは2種類の広報用のアートワークを制作した。片方は展覧会で展示され、もう片方は展覧会が各地を巡回するにつれて、ライブツィヒ、ロンドン、シカゴの街中に貼られる。前者は、この秋にグリグリーがメイン州を訪れた際に撮影したヘラジカの写真を採用している。ギャラリーの外に貼られる後者のアートワークには、前者のヘラジカの作品がたくさんポスターや告知にまぎれて貼られた掲示板を撮影した写真が使われている。グリグリーの作品は、パブリックとパブリックでないものを同等に扱い、それらを接続することで、現代美術のコミュニケーションと表象についての重要な問題を提起しており、それはグリグリーとカイズとの書籍『展覧会の補綴』の共同制作とも直接的に関連する問題である。

『展覧会の補綴』
出版物, 2010年

『展覧会の補綴』(初版と第二版が展示された)は、2009年2月18日にアーキテクチュラル・アソシエーションにおいて開催されたジョセフ・グリグリー(とハンス・ウルリッヒ・オブリストとカイズ)によるレクチャーをもとに生まれた書物である。同書は彼が「展覧会の補綴」という用語で示したもの——プレスリリース、アナウンスメント・カード、チェックリスト、壁面用ラベル、カタログ、その他の宣伝用メディアの形式といった展覧会の制作とマーケティングに関連する数々の実践——へのグリグリーの関心を探求したものだ。それらの様々な慣習が、実際にはアートの一部であり、単なる延長線上のものではないということについて同書は研究しており、それゆえグラフィックデザイナーも不可欠の存在として関係するものとみなしている。ベッドフォード・プレスから刊行された初版はすでに絶版となっており、その後、2010年にニューヨーク近代美術館とPS1におけるニューヨーク・アートブックフェアで開催されたジョセフ・グリグリーの展覧会「情報のエコノミー」において増補第二版が再刊された。

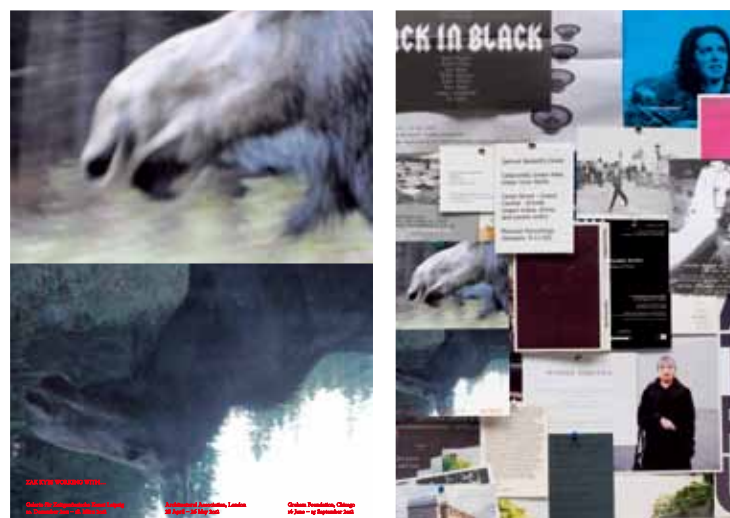


Exhibition Prosthetics
Publication, 2010

Exhibition Prosthetics (the first and second editions shown here) originated from a lecture by Joseph Grigely (with Hans Ulrich Obrist and Kyes) at the Architectural Association, London, on 18 February 2009. The book explores Grigely's interest in what he terms 'exhibition prosthetics'—an array of practices related to the making and marketing of exhibitions, including press releases, announcement cards, checklists, wall labels, catalogues and related forms of promotional media. It investigates the extent to which these various conventions are actually part of the art and not simply an extension of it, thereby implicating the graphic designer as integral. The out-of-print first edition was published by Bedford Press in 2010 and later reprinted in an enlarged second edition on the occasion of Joseph Grigely's exhibition 'The Information Economy' at the New York Art Book Fair, MoMA PS1, 2010.

Joseph Grigely
Exhibition Posters, 2011

For the exhibition artist Joseph Grigely created two different promotional artworks; one displayed in the exhibition and another for plastering throughout Leipzig, London and Chicago, where the exhibition will subsequently travel. The first features a moose Grigely photographed at a trailhead in Maine this fall. The second artwork, installed outside the gallery, features a photograph of a bulletin board on which the first work is displayed alongside numerous other posters and announcements. Grigely's contribution explores and connects the public and the nonpublic in equal measure, raising important questions about the communication and representation of contemporary art, and relating it directly to Grigely's collaboration with Kyes on the book Exhibition Prosthetics.





シャルル・アルセーヌ・アンリ,
シュモン・バザール
音声ガイド, 2011年

Charles Arsène Henry and Shumon Basar
Audio Guide, 2011

「ザック・カイズとの共同制作」展の音声ガイドは、ライターのシャルル・アルセーヌ・アンリとシュモン・バザールによって着想され、ナレーションはタマラ・バーネット・ヘリンとゾフィー・C・ベルンハルトによって担当された。展覧会の展示作品を説明するよりも、むしろ共同制作の軌跡を『ワン・プラス・ワン』のように脚本化した。5つのトラックと4つの諸要素が、想像上のプロジェクトについての案内をする。冒頭部における失敗することへの恐れへの可能性の高まりから、ガラスの家で嵐が去るのを待っている場面に至るまで、「1と1を足すと何になるのか」という問いが繰り返される。入口に置かれた音声ガイドを手にとって再生ボタンを押してください。

The audio guide for 'Zak Kyes Working With...' was conceived by writers Charles Arsène Henry and Shumon Basar, with narration by Tamara Barnett Herrin and Sophie C. Bernhard. Rather than describing the objects presented in the exhibition, 'One Plus One' scripts the trajectory of working together. Five tracks and four equations guide you through an imagined project. From the initial explosion of possibilities to the fear of failing to the scene of a glass house waiting for a storm, a question persists: what is the sum of one plus one? Please pick up audio guide at the entrance and press play.

『トランスレイテッド・バイ』
出版物, 2010年

シャルル・アルセーヌ・アンリとシュモン・バザールの編集による書物『トランスレイテッド・バイ』(「翻訳された」の意) (ベッドフォード・プレス, 2010年) は、書名と同名のオーディオによる展覧会に伴って発行された。場所にまつわる創作や解釈を行なった11人の作家を集めた展覧会である。それらの文学作品における場所は、朗読を通じた非物質的な翻訳行為にさらされることになる。展示に伴う出版物では、展覧会がふたたび印刷物の形態へと翻訳される。同書は、未断裁の折丁をとまなう閉じられた書物として製本され、読者は各ページを手で切り開いていくことが求められ、その身体的な行為としての読書を通じて書物はかたちを変えていくのだ。物語はパレスチナ自治区ラマラから始まり、世紀転換期のブルガリアの首都ソフィアの回想、宇宙船のような外観のドーハのシェラトンホテルの思い出、メタバースの仮想空間を抜けて、西バンクーバーの世界の果てで終わりを遂げる。

Translated By
Publication, 2010

Translated By is edited by Charles Arsène Henry and Shumon Basar (Bedford Press, 2010) and accompanied the eponymous audio exhibition, which gathered eleven writers who each invented or interpreted a place. These literary places were then subjected to an act of immaterial translation via the voice. The accompanying publication translated the exhibition back into printed form; bound as an unopened book with uncut signatures, the reader is required to hand-slit the pages, allowing the book to transform through the physical act of reading. The stories run through Ramallah, recollect turn-of-the-century Sofia, remember the space ship-looking Sheraton Hotel in Doha, wander through the 'Metaverse' and end at the end of the world in West Vancouver.



1.2.12

LEIPZIG PAPERS

Workshop with Can Altay and Zak Kyes

Publishing can take a myriad of forms and formats which are united in the act of making public. Referring to the original Latin sense of the word 'publicare' ("to make public") the question of publishing is a hybrid of display and making physically available in order to create a public.

The participants in this day-long workshop asked to bring found material to the workshop that has been published in Leipzig. This material will compose the core of the collective publication titled Leipzig Papers.

The original found material will be used by the group in two ways; first in the form of excerpts and extracts to be included in the publication and secondly as artefacts to be displayed on the workshop table for the duration of the exhibition.

The source material can range from ephemera to books and advertising, the only criteria being that it has been published in Leipzig. The outcome will be a publication titled 'Leipzig Papers' which brings together the re-worked material alongside a display of all source items together with the tables.

The workshop will take place around the workshop table, and be composed of three sessions: an introduction in the morning in which each participant will present their material for 10 minutes followed by a group discussion; an afternoon session to discuss the work-in-progress; and a conclusion in the evening in which something resembling a book, along with the original materials will be displayed on the workshop tables. The day's work will be displayed until the end of the exhibition.

ライブツイヒ・ペーパーズ
ジャン・アルタイとザック・カイズとのワークショップ

出版行為は無数の形をとるものであり、パブリックにする行為という点で共通している形式であると理解できる。語源であるラテン語の 'publicare' ("パブリックにすること" という含意) を参照すると、出版行為にかかわる問題には、公衆を創出するための表示行為と物理的に利用可能にすることが混成しているのである。

この1日中かけて行なわれるワークショップの参加者には、まずライブツイヒで出版されたものを見つけ出し、その資料をワークショップに持ち寄ることが依頼される。この資料はライブツイヒ・ペーパーズと題した共同出版物の核心部を構成するものになる。

元々の見出された資料は、グループによって2通りの方法で使用される。第一に引用や要約の形式をとって出版物に収録され、第二に展覧会の会期のあいだワークショップ用の机のうえの展示品となる。

原資料はエフェメラから書物や広告まで多岐に及び、その唯一の選定基準はライブツイヒで出版されたもの、という点である。そのテーブルのうえに集められた全原資料の細目の展示と同時に、再利用された資料を集めた成果物はライブツイヒ・ペーパーズという名前の出版物になる。

3つのセッションから構成されるワークショップは、ワークショップ用の机を囲んで行なわれる。朝のイントロダクションでは各参加者は10分間づつ持ち寄った資料について発表し、その後グループ・ディスカッションに入る。午後のセッションでは進行中の制作物について議論する。夕方のもどめのセッションでは、書物のようなものを、原資料と並べてワークショップ用の机のうえに展示し、その日の制作物は、展覧会の会期終了まで展示される。

ライブツイヒ・ペーパーズ
ワークショップ, 2012年

Leipzig Papers
Workshop, 2012

ジャン・アルタイとカイズが以前開催したワークショップの趣意書が、本展のために増補・改訂された。こうした趣意書は、前回の共同作業の痕跡であるのと同時に、今後の課題を示すものとして、アーティストとグラフィックデザイナー両者の実践が重なる共通の関心領域を明確に伝えている。参加者は、展示の問題に関するとりとめのない企画書を出すように依頼され、書くことと編集作業とデザインを組み合わせたような代物を公開する。ワークショップ「ライブツイヒ・ペーパーズ」は、2012年2月1日10時から開催された。

The brief from a previous workshop by Can Altay and Kyes has been expanded and revised for this exhibition. As such the brief is both a trace of an earlier collaboration and a future proposition articulating common areas of interest in which the practices of an artist and graphic designer overlap. Participants are invited to develop a discursive proposal that addresses questions of display and making public such that writing, editing and designing are combined. The workshop, Leipzig Papers took place on 1 February 2012, at 10am.



ジャン・アルタイ
公開ワークショップと舞台装置, 2011年

Can Altay
Public Workshop and Setting, 2011

美術家のジャン・アルタイは「ベッセル・フォン・ゲグノンの出版ワークショップ」という架空のタイトルのワークショップを会期中に催し、また、空間が「出会いのための器 (ベッセル・フォン・ゲグノンの訳)」となり得るような可能性を2台のスタッキング・テーブルによって暗に示したインスタレーションも展示する。それらのテーブルを囲んで、12人の参加者を募り、1日かけてワークショップを行い、そこで制作したエフェメラは会期中にテーブル上に展示される予定である。この新作は、2011年にユトレヒトの美術・デザイン・理論のための事務所 Casco の企画により、ジャン・アルタイとザック・カイズが行なった「出版講座」という先行するワークショップの内容とも関連している。

The fictitious title of artist Can Altay's workshop for the exhibition, 'Wessel von Gengnung Publication Workshop', and installation of two stacking tables both suggest the potential for a space to be a vessel for encounter. A day-long workshop, involving twelve participants, will occur around the tables, and ephemera from the workshop will be displayed on the tables for the duration of the exhibition. This new work relates to an earlier workshop, 'Publishing Class', by Can Altay and Kyes, organized by Casco Office for Art, Design and Theory, Utrecht, 2011.



エドワード・ボトムス
レクチャーと2台のスライド映写機, 2011]

「ザック・カイズとの共同制作」展の文脈のなかで、アーキビストのエドワード・ボトムスは、実験、コラボレーション、議論、そして論争の場として、定期刊行物の利用を促進し奨励し、手助けすることに、特に努力を払ってきたアーキテクチュラル・アソシエーションの歴史を検証した「独立した場所：アーキテクチュラル・アソシエーションの出版活動の実験」と題したレクチャーを行った。展示会場では2台のスライド映写機によって、1880年代から現在までの学生による出版物の歴史的事例の調査結果が投影され、歴史的資料と現在のプロジェクトと——例えばベッドフォード・プレスと建築家革命評議会(ARC)の1975年の制作物が——同時併置される。

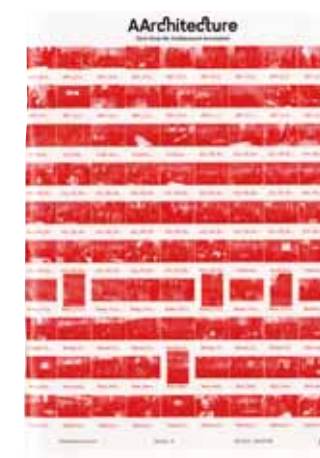


Edward Bottoms
Lecture and Double Slide Projection, 2011

Within the context of 'Zak Kyes Working With...' archivist Edward Bottoms will present the lecture 'Independent Site: Experiments in Publishing at the Architectural Association', exploring the Architectural Association's particular efforts to stimulate, encourage and facilitate the use of journals as sites for experimentation, collaboration, discussion and debate. Within the exhibition, a double slide projection presents a survey of historic student publications from the 1880s to the present, juxtaposing current projects such as Bedford Press with a 1975 work by the Architects Revolutionary Council (ARC).

多種多様な出版プロジェクト:
「AArchitecture」誌,
『L.A.W.U.N. プロジェクト #19』,
『マ・ニ・フェスト』,
「ゴースト・ダンス・タイムズ」紙,
『パブリック・オケイジョン・エージェンシー』,
『フルクラム』
出版物, 2006–2011年

エドワード・ボトムスの歴史的資料のスライドには、ロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーションでつくられた様々な同時代の出版物も織り込まれている。そのうちのいくつかはカイズも直接関係しているものだ。例えば学生の協力のもとでAAの印刷スタジオで制作されている「AArchitecture」誌や、「オンデマンド出版」の授業の受講者が制作した『マ・ニ・フェスト』、その他には、『パブリック・オケイジョン・エージェンシー』、「ゴースト・ダンス・タイムズ」紙、『フルクラム』などは昨今の学生主体の出版活動の復活を示している。もともとは異なる文脈から現れたものとはいえ、これらの自発的な出版活動は、すでに存在する歴史的モデルの系譜にある。ただし、それは過去へのノスタルジアから出て来たものではなく、議論と交換のための場として、先行する出版物に再び光を当て、現在や将来にとっての潜在性を再検証していこうという試みなのである。



Various Publication Projects:
AArchitecture, L.A.W.U.N. Project #19,
Man-i-fest, Satellite & Ghost Dance Times,
POA, Fulcrum
Publications, 2006–2011

I DO NOT WANT TO TALK TO YOU
ABOUT ARCHITECTURE.
I DETEST TALK ABOUT ARCHITECTURE!

Woven into the historical slide projection by Edward Bottoms is a panoply of contemporary publications originating at the Architectural Association, London. Some are directly linked to Kyes, such as AArchitecture, produced by the AA Print Studio with student contributors, and Man-i-fest, produced by students of the class 'Publish on Demand', while others, including Public Occasion Agency (POA), Ghost Dance Times and Fulcrum, present the current resurgence of student-initiated publications. While emerging from a different context, these publishing initiatives revisit earlier historical models, not out of nostalgia for the past but in an attempt to reengage prior publications as sites for debate and exchange, and to examine their potential in the present and the future.



ウェイン・ダリー
 展覧会カタログ(見積書), 2011年

グラフィックデザイナーのウェイン・ダリーによる展覧会のための制作物は、出版物『ザック・カイズとの共同制作』(スタンバーグ・プレス, 2012年)の印刷見積書と束見本のかたちをとる。2012年5月の刊行に先立ち、白紙状態の書物、つまり束見本によって、各種の素材の選択やモノとしての完成形を表すのと同時に、その制作のプロセスを露呈させている。束見本の周囲には、これから併合・再構築される予定の素材が並んでいる。イエスコ・フィザーの2番目のルール(「2. 残念ながら、本を置くこともしない」)に従うことによって、注意すべきことに、この手に取ることのできる唯一の本は白紙となっている。



Wayne Daly
 Exhibition Catalogue (Estimate), 2011

Graphic designer Wayne Daly's work for the exhibition takes the form a bulking dummy and print production estimate for the publication Zak Kyes Working With... (Sternberg Press, 2012). In advance of the publication in May 2012, the blank book, or bulking dummy, represents the material choices and final object, thereby exposing the production process. The dummy is surrounded by the very work that will soon be absorbed and reassembled. In response to Jesko Fezer's second rule ('2. Unfortunately, no books either') it should be noted that this, the only accessible book, is blank.

Zak Kyes Working With...
 Can Altay
 Charles Arsène-Henry
 Shumon Basar
 Richard Birkett
 Andrew Blauvelt
 Edward Bottoms
 Wayne Daly
 Jesko Fezer
 Joseph Grigely
 Nikolaus Hirsch
 Maria Lind
 Markus Miessen
 Michel Müller
 Radim Peško
 Barbara Steiner



Bedford Press
 Publishing Imprint, 2009-

Bedford Press is an imprint of AA Publications dedicated to creating a new typology of publications that explore architecture through the lens of its allied disciplines. Titles encompassing art, exhibition-making, graphic design and theory build upon the AA's renowned legacy of short-run, independent publications. BP was co-founded by Zak Kyes and Wayne Daly. The press emerged from an earlier onsite print workshop established for the production of printed matter for the AA School. These experiments suggest a more responsive model of small-scale publishing, nimble enough to encompass the entire chain of production in a single fluid activity. Here the first products of the workshop, including ephemera such as pamphlets, posters and limited-edition prints, are shown alongside BP publications.

ベッドフォード・プレス
 出版・印刷工房, 2009年-

ベッドフォード・プレスはAAの出版物のための出版社・印刷工房で、建築と結びついた関連領域の視点から建築を探求していくための出版物の新たなタイポロジーをつくりだすために活動している。美術、展覧会制作、グラフィックデザイン、理論など多分野にまたがるその刊行物は、短命に終わった独立系出版物を刊行してきたAAの遺産の基盤のうえに成り立っている。BPは、ザック・カイズとウェイン・ダリーによって共同設立された。ベッドフォード・プレスの出自は、AAスクールのために印刷物を生産する学校施設内の印刷工房として立ち上げられたものだ。そうした実験活動は、ひとつの流れるような活動のなかで全ての生産工程を網羅するのに十分に融通が利いた、より手応えのある小規模出版活動のモデルを提案する。会場では、BPの出版物とともに、工房の制作物——小冊子やポスター、限定版の印刷物などのエフェメラを展示する。

ザック・カイズのアプローチ 古賀稔章
グラフィックデザインの再定義

グラフィックデザインは、ある1人のデザイナーによって命名されたことで、20世紀初頭に立ち現れた専門領域である。その起源をふり返れば、米国のデザイナー、ウィリアム・A・ドゥイギンスが「ボストン・イブニング・トランスクリプト」紙の1922年8月29日号に発表した記事「新しいデザインのための新しい種の印刷を」において、「グラフィックデザイン」という造語を初めて用いたことに端を発する、と言われる。

一方で、タイポグラフィという専門領域の定義については、さらに17世紀後半にまで時代を遡る。あらゆる言語に先んじて世界初の印刷手引書『メカニック・エクササイズ』(1683-84年)を英語で執筆したジョセフ・モクソンは同書で、建築理論家のウィトルウィウスやレオン・バッティスタ・アルベルティらが建築家と大工の違いを論じたことを参照しつつ、タイポグラフィと印刷工とを区別した。活字書体製作や印刷、出版に精通していたモクソンにとって、タイポグラフィとは、自らの判断によってタイポグラフィに関連する全ての手仕事や物質的操作を、最初から最後まで実演することのできる人物に対して与えられるべき呼称であった。

このようにグラフィックデザインやタイポグラフィという領域では、つねに実践者たち自らが発する言葉によって、その専門領域を定義づけるための探求がなされてきたのである。

それでは、21世紀を生きる現代のデザイナーたちは、いかに自らの実践を位置づけているのだろうか。モクソンと同様に、建築との交差点においてグラフィックデザインの専門領域について議論した最近の試みとして挙げられるのが、2007年にロンドンの建築学校アーキテクチュラル・アソシエーションにおいて開催された展覧会「フォームズ・オブ・インクワイアリ：批評的グラフィックデザインのアーキテクチャ」である。

この展覧会の企画者で、同校の印刷スタジオのアートディレクターを務めるスイス系アメリカ人デザイナーのザック・カイズと、カタログの共編者で、領域横断的に活動しながら評論活動も積極的に行うアメリカ人デザイナーのマーク・オーウェンスは、同展に3つのキュレーション上の枠組——「タイポグラフィックス」「生産様式」「方法論」——を導入することで、現代のグラフィックデザイナーたちの批評的実践の言語化を試みたのである。

なかでも興味深い指摘をしているのが「生産様式」のセクションだ。印刷物製作のテクノロジーの民主化、自発的出版物の増殖、ポスト・フォード主義への移行といった社会-経済的状況の変化を反映したデザイナーの新しい実践のモデルに関して、カイズらは、発注者／デザイナーの関係を前提とするグラフィックデザインのサービス業態の範囲を越えて近年台頭してきた「デザイナー兼出版者」たちによる出版活動を参照している。

編集作業、キュレーション、レクチャー、サイトスペシフィック

な企画、作家やアーティストたちとの対話的な制作活動まで、出版物がつくられる際のコンテキストの形成に関わり、その内容づくりから流通経路にいたる生産プロセスの分業体制を再編成していくデザイナーたち——例えば「Dot Dot Dot」誌のデクスター・シニスター、「Sexymachinery」誌のアバケ、「F.R.David」誌のウィル・ホルダーといった同時代の並走者たち——の実践に、カイズたちは「よりフレキシブルに、より開かれ、より複合的な」新たな生産様式の特徴を見出そうとした。そして、この生産様式は、カイズ自身の実践についても同じく当てはまるものと言えるだろう。

議論と交換のための出版
南カリフォルニアでスイス人の母親とアメリカ人の父親のもとで生まれたカイズは、ニューヨークの大学で美術史とビジネスを専攻した後、カリフォルニア芸術大学の批評的な校風のなかでデザインを学んだ。その後、ロンドンに生活と仕事の拠点を移したカイズは、2005年にデザイン事務所ザック・グループを設立し、その翌年にはアーキグラムのデニス・シャープによって設置されたアーキテクチュラル・アソシエーション（以下、AAと略記）の印刷スタジオにアートディレクターとして加わるることとなる。

ロンドンという世界の文化的生産の震源地で、カイズは個人のグラフィックデザイナーとしてアーティスト、キュレーター、批評家、建築家などと共同で多数のプロジェクトに関わる一方、AA内部で生産される様々な言説——講義録、批評、学生の自主プロジェクトなど——を、いわば「紙上の建築物」として組織的に発信していくための編集作業や同校の教育現場にも携わってきた。このふたつの立場を行き来する絶えざる往復運動は、彼にグラフィックデザイナーとしての自らのアイデンティティを確立するための最良の機会を与えた。

2008年にカイズは、同じくAAの印刷スタジオのデザイナーであるウェイン・ダリーと共にプライベート出版社ベッドフォード・プレスを共同設立する。カイズたちはリコーの印刷機ブリポート DX 4640 PDというミニマムな設備からなる印刷工房を用いたベッドフォード・プレスの出版活動を通じて、企画立案、編集、デザイン、印刷、流通といった複数の生産過程にまたがる実践を展開し、出版物の制作工程を全般にわたって“最初から最後まで”担うような小規模出版のモデルを探求してきた。

文化の生みだされる現場としてのインスティテューションの内部に、ごく小さな出版・印刷工房を組織した彼らの実践は、2006年の「マニフェスタ6」のアートスクールのためにデクスター・シニスターが構想した印刷工房と同様に、出版物が担うべき役割に関する転換点を体现するプロジェクトのひとつとして評価できるだろう。この現代の出版行為の転換点に対するカイズの見解は、キュレーターのハンス・ウルリッヒ・オプリストの企画で、2008年10月18日にサーペンタイン・ギャラリーで開催された「マニフェスト・マラソン」(カイズは同書籍のデザインも担当)における彼自身の態度表明にあらわされて

いた。曰く「出版と散種の行為は、単なるドキュメンテーションではなく、むしろ議論と交換の場」なのである、と。

この出版という行為が「議論と交換の場」であるという態度は、例えば、2010年に美術ライターのマリア・フスコがロンドンのアートスペース ICA において企画したイベント「コージー・コンプレックス」のプロジェクトでも発揮されている。彼女らはICA館内のリーディングルームに仮設の出版・編集工房をつくりだし、討論会、発表、パフォーマンスなどが行なわれる現場で、イベントに付随する冊子『コージー・コンプレックス・リーダー』(ベッドフォード・プレス刊)を公開制作したのである。また、先の展覧会「フォームズ・オブ・インクワイアリ」においても、同展のカタログにおける“問いかけ”は、その後の巡回先となった各地の美術施設や教育機関——ユトレヒトのCASCOや、スウェーデンの美術財団のプログラム IASPIS、チューリッヒのアーキズーム等における関連イベントに引き継がれ、『デザインと批評的实践についての Iaspis フォーラム』(スタンバーグ・プレス刊)や『フォームズ・オブ・インクワイアリ・アネックス』(ペッドフォード・プレス刊)などの継続的な「議論と交換」のための関連出版物に広がっていった。

<p>媒介者としての実践</p>

グラフィックデザイナーの新たな生産様式を批評的に実践するのと同時に、議論と交換の場に継続的に関わってきたカイズの現在進行形の到達点を伝える展覧会「ザック・カイズとの共同制作」が、2011年冬から2012年にかけてライブツィヒ現代美術館、ロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーション、シカゴのグラハム美術高等研究財団と各都市を巡回しつつ開催されている。同展に合わせて2012年6月には、出版物『ザック・カイズとの共同制作』がスタンバーグ・プレスより刊行される予定だ。この展覧会／出版物「ザック・カイズとの共同制作」は、ここまで見てきたようなグラフィックデザインという専門領域の再定義や、その「デザイナー兼出版者」としての出版活動のモデルに関する議論に、いかなる寄与をはたしているのか。

それを端的に示しているのは、デザイナーという主体の存在様式が「媒介者」であるという明確な位置づけである。「ザック・カイズとの共同制作」展のテキストで述べられているように、グラフィックデザインとは「関連する諸領域との仲介役を果たす実践である」と同時に、諸領域との相互作用が介在することによって成り立っている実践である」という点において、二重の意味で他者との媒介によって存在している専門領域なのである。美術、建築、デザインといった区分を越え、それら隣接領域との「媒介者」として多様な共同制作に関わるグラフィックデザイナーの実践を展示空間のなかに具現化するために、カイズは展覧会に付随する関連印刷物の制作といった「デザイナー兼出版者」としての立場だけに留まらず、さらに「展覧会という形式」それ自体への介入をも試みなければならなかった。

「ザック・カイズとの共同制作」展でカイズは、過去から

現在に至るまでに彼が関わってきた制作物を時系列に沿って展示することは行わず、むしろ、様々な隣接する専門領域に属するコラボレーターとの関係性それ自体を、展示空間のなかに顕在化させることに焦点を当てた。そのための手法として、

彼は共同制作者たちに対して、展覧会という形式を構成する諸要素——ポスター等の広報物、展示空間の構造、作品キャプション、関連ワークショップやレクチャーなど——を共同制作するコラボレーターとしての役割を与えた。また、この新たな共同作業は、カイズとの過去のプロジェクトを通じて、各コラボレーターとのあいだに培われた相互理解や共通の問題意識が反映されており、それを継続的に追及する機会にもなり得ている。

具体的に、同展における各コラボレーターとの共同制作を列挙すると、建築家のイエスコ・フィザーは展示空間の設計のための規則を、建築家のニコラウス・ヒルシュとミヒェル・ミュラーは展覧会のアーカイブを、デザイナーのラディム・ペスコは展覧会場の壁面の作品解説などで用いる活字書体のデザインを、そして美術家のジョセフ・グリグリーは展覧会の内外で掲示されるポスターを、ライターのシャルル・アルセース・アンリとシュモン・バザールは音声ガイドの制作を担っている。

<p>…と共に制作する</p>

こうしたグラフィックデザイナーによる美術館や展覧会という形式への介入は、当然ながら今になって始まったわけではない。ならばカイズの展覧会における議論の射程を、グラフィックデザインの歴史的な系譜のうえにあるものとして理解するためにも、ここで改めてモダンデザインの時代の先駆者による実践について参照しておきたい。

美術館という制度の内部に身を置いたデザイナー像を最も雄弁に体现した人物といえば、おそらく多くの人が、オランダを代表するデザイナーのウィム・クロウエルの名前を想起するだろう。60年代初頭からクロウエルを知るスイス生まれのキュレーターのハラルド・ゼーマンは、作品集『Kunst + Design』(1991年)に「クロウエルのアプローチ」と題した論考を寄せている。ゼーマンはまず、クロウエルがステデリック美術館において「高度に想像的な水準における幅広い公衆との対話の形式としての

現在に至るまでに彼が関わってきた制作物を時系列に沿って展示することは行わず、むしろ、様々な隣接する専門領域に属するコラボレーターとの関係性それ自体を、展示空間のなかに顕在化させることに焦点を当てた。そのための手法として、彼は共同制作者たちに対して、展覧会という形式を構成する諸要素——ポスター等の広報物、展示空間の構造、作品キャプション、関連ワークショップやレクチャーなど——を共同制作するコラボレーターとしての役割を与えた。また、この新たな共同作業は、カイズとの過去のプロジェクトを通じて、各コラボレーターとのあいだに培われた相互理解や共通の問題意識が反映されており、それを継続的に追及する機会にもなり得ている。

具体的に、同展における各コラボレーターとの共同制作を列挙すると、建築家のイエスコ・フィザーは展示空間の設計のための規則を、建築家のニコラウス・ヒルシュとミヒェル・ミュラーは展覧会のアーカイブを、デザイナーのラディム・ペスコは展覧会場の壁面の作品解説などで用いる活字書体のデザインを、そして美術家のジョセフ・グリグリーは展覧会の内外で掲示されるポスターを、ライターのシャルル・アルセース・アンリとシュモン・バザールは音声ガイドの制作を担っている。

また、展示の会期中に美術家のジャン・アルタイは公開ワークショップを、アーキビストのエドワード・ボトムスはAAの出版活動の歴史に関するレクチャーを行い、ウェイン・ダリーは展覧会に際して出版される書籍のデザインと見積作成を行なった。それらの結果として、展覧会場には彼らとのあいだで過去になされた共同制作の成果物と、今回の新たな共同制作にあたる展覧会の諸要素に関連した制作物の両者が同時併置されることになった。つまり「ザック・カイズとの共同制作」という題名がパフォーマンスに言明しているのは、過去及び今回の共同制作の成果物を展示した展覧会であるのと同時に、展覧会そのものが共同制作である、という同展の内包する二重構造の暗示なのである。

<p>…と共に制作する</p>

こうしたグラフィックデザイナーによる美術館や展覧会という形式への介入は、当然ながら今になって始まったわけではない。ならばカイズの展覧会における議論の射程を、グラフィックデザインの歴史的な系譜のうえにあるものとして理解するためにも、ここで改めてモダンデザインの時代の先駆者による実践について参照しておきたい。

美術館という制度の内部に身を置いたデザイナー像を最も雄弁に体现した人物といえば、おそらく多くの人が、オランダを代表するデザイナーのウィム・クロウエルの名前を想起するだろう。60年代初頭からクロウエルを知るスイス生まれのキュレーターのハラルド・ゼーマンは、作品集『Kunst + Design』(1991年)に「クロウエルのアプローチ」と題した論考を寄せている。

ゼーマンはまず、クロウエルがステデリック美術館において「高度に想像的な水準における幅広い公衆との対話の形式としての

In his essay for the Crouwel monograph ‘Kunst + Design’

(1991), the Swiss-born curator Harald Szeemann recalls collaborat- ing with Crouwel at Museum Boymans van Beuningen in the late 80s. Szeemann was invited to host the exhibition entitled “A Historical Sounds” with Museum’s collection. Within the essay, he praises Crouwel’s measures to invite guest curators to open up new possibilities for the museum collection and to move beyond typical disciplinary borders.

He writes further:

“The works were to be arranged in relation to one another in such way that something like zone of a freedom and of the utopian condition of the ideal society in the form of an academia of ” non-oneness “ in togetherness would be immediately perceptible.”

In response to Crouwel’ s request for trans-disciplinarity and for open communication, Szeemann attempted to give physicality to the concept of “non-oneness” in real form in the exhibition space, bringing works from different contexts together into a single space, creating mutual relationships to be interpreted by the viewer.

One can connect the simultaneity present in both Szeemann’s “non-oneness” and Kyes’ “mediation with allied disciplines”, further opening up the potential of graphic design. These related systems are reflected in Andrew Blauvelt’s essay “Toward Critical Autonomy, or Can Graphic Design Save Itself?”, wherein he states, “...graphic design must be seen as a discipline capable of generating meaning out of its own intrinsic resources without reliance on commissions, functions, or specific materials or means.” Blauvelt’s essay stresses the importance of a disavowal of mere personal expression and stylistic formulation, focusing more on a self-aware, systems-based way of approaching inter-disciplinary. The inter- subjective nature of Kyes’ approach to “mediation” is not intended to conflict with the autonomy or speciality of graphic design, but instead to emphasize the coordinating, collaborative aspects of practice and function.

Kyes presents the exhibition as a designer working as a hub central to allied disciplines and as a mediating force in the collabora- tive process. It promotes the multi-disciplinary nature of graphic design, suggesting that the field is organized at the intersection of people concerned, with Kyes’ activities being the lens giving focus to the concepts in play.

“Working With...” positions graphic design as a field of practice of a dual nature: one where a single practice can be articulated by and attributed to the labor of the individual as much as a collective, pluralistic area of labor.

upstate New York, he studied graphic design at CalArts in Los Angeles. Kyes set up his own studio Zak group in 2005 and joined Architectural Association in London as art director in 2006. While working on the school’s projects, exhibitions and publications, he simultaneously collaborated with artists, curators, critics and architects on a constant basis. This dual approach to working has led credence to this young designer’s growing critical practice. In 2008, he cofounded Bedford Press, an independent publishing house, with his AA colleague, designer Wayne Daly.

Kyes expressed his interest and intent in the act of publishing as creating “sites for debate and exchange rather than mere documentation” on the occasion of 2008’s “Manifesto Marathon”, organized by Hans-Ulrich Obrist and held at Serpentine Gallery (Not surprisingly, Zak also designed the event’s catalog).

His approach to publishing has been exercised in projects like the aforementioned “Forms of Inquiry” exhibition, as well as in related events and publications such as the “Iaspis Forum on Design and Critical Practice” and the “Forms of Inquiry Annex”, as well as his contributions to projects like 2010’s one-day event and publica- tion “Cosey Complex”.

The exhibition “Zak Kyes Working With...” has been exhibited in Leipzig, London and Chicago in 2011 and 2012. The accompanying catalog will be published by Sternberg Press in June 2012. Within are more fully developed discussions about the role of the designer and the continued evolution of design as discipline, asserting Kyes’ viewpoint of designer as mediator. The exhibition presents “contemporary graphic design as a practice that mediates, and is mediated by, its allied disciplines”, as clearly stated in the introduction text.

Kyes’ focus is to make relations with collaborators of allied disciplines visible and overt, emphasizing the nature of the collaborative process. His past work will not be exhibited chronologically, instead having requested that the original collaborators involved in past individual projects be involved in creating new elements of the exhibition in form of printed matter, exhibition design, written content, workshops and lectures.

—

In order to more fully understand Kyes’ approach in historical context, it is good to look back in history to other design practitioners who have engaged holistically with the forms of the museum and the exhibition. The influential Dutch designer Wim Crouwel springs immediately to mind – after being heavily engaged in the design of posters and catalogs for the Stedelijk Museum for many years, he was appointed the director of Museum Boymans van Beuningen in the mid 1980s.

The Approach of Zak Kyes

Toshiaki Koga

—

The range or definition of a discipline is to be shaped according to the historical situation by discourse shaped by theorists and practitioners. The term “Graphic design” was named, and therefore came into existence, at the beginning of the 20th century by an American designer W. A. Dwiggins. He coined the term in his article “A New Kind of Printing Calls for A New Design” in a special supplement of ‘the Boston Evening Transcript’.

Much earlier in history, Joseph Moxon analyzed the role of the typographer from the viewpoint of the role as an integrated profession that combined mechanical skill with intelligence and knowledge in his “Mechanik Excersis”, the first known published printing manual.

With these historical concepts helping define the conceptual evolution of the designer as an archetype, how might we interpret the role of “designer” in the 21st century?

“Forms of Inquiry: The Architecture of Critical Graphic Design” was an exhibition held at Architectural Association in London in 2007. It was a striking event that gave birth to a variety of discussions on the ontology of contemporary graphic design. Each of the works exhibited was an examination of the intersection of graphic design and architecture. These assorted projects were organized into three curatorial frames: “Typographics”, “Modes of Production” and “Methodologies”.

Most critical was the “Modes of Production” section, which was devoted to recent activities of individuals working as “designer / publishers”. Due to the democratization of printing technologies, the rapid increase of assorted self-publishing communities and social conditions incurred by the Post-Fordist economic scheme, many designers are involved in the ‘whole’ process of book making: including writing, editing, curation, lecturing, and site-specific projects to conversations with authors and artists.

The “designer/publisher” method of configuring the division of labor is an alternative to the conventional “problem-solving” service provider role in the client/designer working model. This particular “new Mode of Production” was offered up as being “more flexible, more open, and more complex”.

—

This methodological approach is mirrored in the work of Swiss-American Zak Kyes, the curator of the exhibition. After studying art history and business at Skidmore College in

印刷物」を制作してきた功績を賞賛した後に、続けて クロウエルが80年代末にロッテルダムのポイマンズ・ファン・ペーニンゲン美術館のディレクターを務めていた時期に実現した同館での共同作業について回想している。そのなかでゼーマンが高く評価しているのは、クロウエルが美術館に「高密度な情報のネットワークとコミュニケーションの可能性をつくり出す」と「各分野のあいだの壁を取り払う」ことに重点を置き、外部からゲストキュレーターを招いて、美術館の収蔵作品への新たな扉を開く「ヒンジ」となる展示企画を監修していた点である。

ゼーマンはクロウエルの委託により、同館の収蔵作品を用いて彼自身が「オブセッションのミュージアム」と呼ぶ活動を展開する最大限の自由を与えられ、1988年に展覧会「非歴史的な音調」を企画した。その作品の選定と展示手法の意図を、ゼーマンは次のように語る。「諸々の作品が相互の関連性で配置される、その方法においては、理想社会のユートピア的条件や自由の領域のようなものが、共に存在した状態にある“非-単一性”のアカデミアという形をとって、直接的に知覚され得るものとなるであろう。」

美術館における表現のジャンル間の障壁を越える横断性と、ネットワークとコミュニケーションの可能性の探求というクロウエルのアプローチへの応答として、ゼーマンは各分野や時代を越えて個別の作品を「相互の関連性」に基づいて同時併置することにより「非-単一性」という主題を展示空間にかたちづくろうと試みた。

このゼーマンの言う「非-単一性」は、カイズの展覧会において提起された、グラフィックデザインという専門領域が本来的に有する隣接諸領域との「媒介性」の問題に接続できるだろう。ただし、ここで留意しておくべきなのは、媒介性という間主観的な自己規定は、グラフィックデザインというジャンルの自律性や専門性の確立を否定することを意図してはいない、ということだ。

むしろ、カイズは展覧会を諸領域との相互作用を生み出すハブとして機能させ、その共同作業の「仲介役」を果たしてみせたことで、グラフィックデザインが複数の人々との関わり合いの交差のなかで成り立っている「非-単一性」な専門領域であることを私たちに示したのである。

私たち鑑賞者や読者は、カイズという1人の「グラフィックデザイナー」という存在をレンズのように介して見ることで、複数の様々な分野にまたがる人々の作品や書物、あるいは世界各地の美術機関や教育施設で生成途上の文化の動向への展望を開くことができるだろう。

「わたし」というデザイナー個人に分節・還元され得る活動と、「わたしたち」という共有名義によって示されるべき集合的な活動とが併存した、単数的であり複数的であるような領域。それが「…と共に制作する (Working With...)」という言葉によって名指された「グラフィックデザイン」という実践なのである。

p. 200-215

All exhibition views, Museum of Contemporary Art Leipzig, 2011.
Photo: Sebastian Schröder.

p. 201

COSEY COMPLEX Reader, 2010.
Image courtesy of Zak Group.

p. 205

Cybermohalla Print Studio, Louisiana Museum of Modern Art, 2011.
Photo: Michel Müller.

p. 205

Interfinitly Mark: Hans Ulrich Obrist, Everything You Always Wanted to Know About Curating**But Were Afraid to Ask, Sternberg Press, 2011.
Photo: Brotherton Lock. Image courtesy of Zak Group.

p. 206

Joseph Grigely, exhibition posters, 2011.
Courtesy of Joseph Grigely.

p. 207

Joseph Grigely, Exhibition Prosthetics, Bedford Press, 2010.
Photo: Brotherton Lock.
Courtesy of the Architectural Association.

p. 209

Translated By, Bedford Press, 2011.
Photo: Brotherton Lock.
Image courtesy of Zak Group.

p. 210

Leipzig Papers: Wessel von Geggung, 2011.
Photo: Can Altay.

p. 211

Workshop brief, Leipzig Papers: Wessel von Geggung, 2011.
Courtesy of Can Altay.

p. 212

Edward Bottoms, archive slides for lecture, 2011.
Photo: Sue Barr.

p. 215

Various Publication Projects.
Courtesy of AA Archives, Scrap Marshall & Jan Nauta and Jack Self & Baldwin.

p. 214

Zak Kyes Working With..., Sternberg Press, 2012.
Image courtesy Wayne Daly.

p. 215

On-Site, Architectural Association, 2010.
Photo: Sue Barr.

ザック・カイズ (1983年生) はロンドンを拠点に活動するスイス系アメリカ人グラフィックデザイナー。カイズはデザイン事務所 Zak Group を2005年に設立し、2006年9月にアートディレクターとしてロンドンの建築教育機関アーキテクチュラル・アソシエーションAAに参加した。2008年にはプライベートプレスでありAAの出版部であるベッドフォード・プレスを共同設立した。

その個人事務所は、2011年にコンセプトチュアル・デザインのためのインフォーム賞を授賞したほか、2010年には「スイスの最も美しい書物」に2度目の授賞をはたした。その仕事は、様々な展覧会に出展されており、主な展覧会に「グラフィックデザイン・ワールドズ」(デザイン美術館トリエンナーレ、ミラノ、2011年)「ワイド・ホワイト・スペース」(CCAワット、サンフランシスコ、2011年)、「書くことという病」(MACBA、バルセロナ、2009年)「都市の(ための)に抗う」グラフィックデザイン」(コーナーカレッジ、チューリッヒ、2009年)、「ドバイ/デュッセルドルフ」(ラインラント及ヴェストファーレン芸術協会、デュッセルドルフ、2009年)「第22回ブルノ国際グラフィックデザイン・ビエンナーレ」(ブルノ、2009年)などがある。

同事務所のプロジェクトの傍らで、カイズは美術機関の依頼(による)との共同制作による出版活動、キュレーション、サイトスペシフィックなプロジェクトなど広範囲に及ぶ批評的実践を行なっている。彼はその活動において、ドキュメンテーションとしてよりも、むしろ議論と交換のための場としての出版活動と散種に関与してきた。

また、カイズはキュレーターとして国際巡回展「フォームズ・オブ・インクワイアリ: 批評的グラフィックデザインのアーキテクチャ」(アーキテクチュラル・アソシエーション、カスコ、ルクス、IASPIS、アーキズーム、ホルテラング、2007-2009年)や、「ジョセフ・グリゲリー: 情報のエコノミー」展(ニューヨーク・アートブックフェア、ニューヨーク、2010年)などを企画した。

編集者及び出版者としてカイズは様々な定期刊行物、雑誌、書籍に寄稿、参加している。様々な共同制作を通じてカイズが編集・刊行してきた書籍の主なものに『フォームズ・オブ・インクワイアリ: 批評的グラフィックデザインのアーキテクチャ』(AA出版部、2007年)、『ザ・リーダー: Iaspis デザインと批評的実践のフォーラム』(IASPIS/スタンバーグ・プレス、2009年)『展覧会の補綴』(ベッドフォード・プレス、2010年)『コージー・コンプレックス・リーダー』(ICA、2010年)『マエルファ』(ベッドフォード・プレス、2010年)などがある。カイズはカリフォルニア芸術学校(CalArts)を卒業後、世界各都市で、数多くの講義、審査員、ワークショップの企画などに携わってきた。代表的なものにロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーション、アーキテクチュラル・アソシエーション建築学校、ベルギーのヘントのフォーロイト劇場、聖ルーカス芸術大学、オランダのユトレヒトのカスコ、アムステルダムのリートフェルト・アカデミー、スウェーデンのストックホルムのIASPIS、スイスのローザンヌのアーキズーム、ECAL(ローザンヌ美術大学)などがある。

彼は現在、ロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーション建築学校とECALの修士課程で教鞭をとっている。

Zak Kyes, *1983, is a Swiss-American graphic designer. Kyes formed the design studio Z.A.K. in 2005 and joined the Architectural Association, London as Art Director in September 2006. In 2008 he co-founded Bedford Press, an imprint of AA Publications.

The studio has been awarded the Inform Award for Conceptual Design in 2011 and was twice awarded the prize for the Most Beautiful Swiss Books in 2010. The studio's work has been included in the exhibitions Graphic Design Worlds (Triennale Design Museum, Milan, 2011), Wide White Space (CCA Wattis, San Francisco, 2011), The Malady of Writing (MACBA, Barcelona, 2009), Graphic Design for and Against Cities (Corner College, Zürich, 2009), Dubai Düsseldorf (Kunstverein für die Rheinlande und Westfalen, Düsseldorf, 2009) and the 22nd International Biennale of Graphic Design (Brno, 2009).

Apart from studio projects Kyes' critical practice encompasses publishing, curating and site-specific projects for and with art institutions. His work engages with publications and their dissemination as sites for debate and exchange rather than documentation.

As a curator Kyes organised the touring exhibition Forms of Inquiry: The Architecture of Critical Graphic Design (Architectural Association, Casco, Lux, IASPIS, Archizoom, BolteLang, 2007-2009) and Joseph Grigely, The Information Economy (NYABF, MoMA PSI, New York, 2010).

As an editor and publisher Kyes has contributed to journals, magazine and edited books. Through different collaborations Kyes has edited and published Forms of Inquiry: The Architecture of Critical Graphic Design (AA Publications, 2007), The Reader: Iaspis Forum on Design and Critical Practice (IASPIS/Sternberg press, 2009), Exhibition Prosthetics (Bedford Press, 2010), Cosey Complex Reader (ICA, 2010) and Maelfa (Bedford Press, 2010).

Kyes graduated from California Institute of the Arts (CalArts) and has since lectured, juried, and taught workshops at London College of Communication; Architectural Association School of Architecture, Kunstencentrum Vooruit, Ghent, Belgium; Casco Projects, Utrecht, the Netherlands; Gerrit Rietveld Academie, Amsterdam, the Netherlands; IASPIS, Stockholm, Sweden; Sint-Lucas beeldende kunst, Ghent, Belgium; Archizoom, Lausanne, Switzerland; and ECAL, Lausanne, Switzerland.

He currently teaches at the Architectural Association School of Architecture, London and in the MA programme at ECAL (Ecole Cantonale d'Art de Lausanne).